

月刊

# いじわるのとも

第八卷

七月号

病んでいる

子どもが

病んでいる

とテレビで

評論家たちは

言う

でも

自分自身が

病んでいるとは

思っていない

本当は

おとなが

病んでいるから

そして

社会全体が

病んでいるから

子どもが

病んで育つのに

# 人生を考え直して

## みたい人は（四三）

『聖書』解説（一九）

九だから、こう祈りなさい。

「天にいます私たちの父よ。

御名（みな）があがめられますように。

十 御国（みくに）が来ますように。

みこころが天で行なわれるように地でも行われますように。

十一 私たちの日ごとの糧（かて）をきょうもおえください。

十二 私たちの負いめをお赦（ゆる）してください  
私たちも、私たちに負いめのある人たちを許しました。

十三 私たちを試みに会わせしないで、悪からお救いください。「国と力と栄えは、とこしえにあなたのものだからです。アーメン。」

十四 もし人の罪を赦すなら、あなたがたの父もあなたがたを赦してくださいます。

十五 しかし、人を赦さないなら、あなたがたの父  
あなたがたの罪をお赦しになりません。

この九節から十三節は、「主の祈り」と呼ばれ、キリスト者の集会（ミサ）では常に唱えられ、みんなが暗記しているようで、とても有名なものです。ですから、多くの解説者が、力を入れて解説しています。

順次、見ていきたいと思えます。

まず、「天にいます私たちの父よ」ですが、父とは、言うまでもなく、神のことです。神に親愛の情をもって、父と呼びかけているのです。それまでの「律法（戒律や信仰上の取決め）」を重視するユダヤ教では、神をこんな、ある意味でくだけた呼び方で言うことはなかったよ  
うで、「こころ」を重視したキリストにして、はじめてできたことだと言えます。

この父の居られる所ですが、それが「天」となっています。私は、神は自分の「精神」の「髄（無意識）」に宿っていて、神の国は自分自身の中に実現するのだと言  
ってきました。ですから、神が天に居られるのはおかし  
いのではないかと思われるかもしれませぬ。

でも、そうではないのです。お祈りするとき、私たちは自分の無意識に宿る神を、祈りを捧げる対象にするこ

とは、無意識のことですから、できないのです。意識して対象とするには、私たちを超えた存在として私たちの外に設定する必要があります。それが祈りのテクニクと言えます。坐禅のように意識を滅し、自分を無にして、ひたすら坐るときには、自分の無意識にまで降りていき、そこに宿っておられる神や仏と出会うことができますが、しかし意識しては、それは不可能なのです。

意識するときには、神や仏を、天であれ、お堂の中であれ、自分の外や廻りに存在するものとして、自分のイメージの中で、その神や仏と一体になるように努力して行かなければならないのです。

それが、天に居られる神であり、仏教で言えば、莊嚴な、さまざまな仏さまなのです。キリスト教では、それを偶像崇拜として排除しているようですが、そうする必要はどこにもありません。むしろ祈りの補助手段として大切なものと言えるのです。

次に「御名（みな）があがめられますように。」ですが、これは自分が神の名（神自身のこと）をあがめるのは勿論、多くの人があがめるようになることをお祈りしているわけです。

ところで、あがめるとは、何でしょうか。それは、神を自分を超えた尊いものとして信じ、それに従って生き

ていこうとすることです。これは、現代人のほとんどが失ってしまったているものです。現代人は、生活が楽になり、自分の生活は自分が自由になると考えています。多くの場合に、日常的な生活上の苦しみから、解放されています。つまり、自分の生老病死を忘れさせ、「日常性へ頹落（たいらく）」させられていると言えるのです。

次に、「十御国（みくに）が来ますように。みこころが天で行われるように地でも行われますように。」ですが、御国が来るとは、これまで言ってきましたように、私たち一人一人の心の中に神の国が実現されるということとです。そして、みこころが天で行われるように地でも行われますようにとは、一人一人が他者に対して神の愛を実行することができるようになる、ということとです。ここでは、自分だけではなく、あらゆる人が、そうなりますようにとお祈りするわけです。

次に、「十一 私たちの日ごとの糧（かて）をきょうもお与えください。」ですが、日ごとの糧とは、食べ物に限らず生活するための、その日その日の物資のことです。 私たち人間は、他者と呼べる、「物」や「生き物」や「他人」に依存しないで生きていくことはできません。

私たち人間は、他のこの世の存在者と同様に、神や仏によつてこの世に「贈られてある」のですから、できるだ

け神や仏の意志に従って、自分たちの命を永らえなければなりません。そのために神や仏にそれが可能であるように、お願いするわけです。

しかし、ここで注意しなければいけないのは、それに執らわれないということと、与えられないから、神を怨んだり、神も仏もないと厭世的になつたりしてはならないということです。むしろ、いま生きている以上、いま生かされて生きていることに感謝しなければならぬのです。飢えたり、凍えたり、灼熱の中にあえいだりして、死に瀕していても、生きている以上、そのことに感謝しなければなりません。しかし、それを理屈でそうするのではなくて、こころの底からはそう思えるのでなければなりません。

次に、「十二 私たちの負いめをお赦してください。私たちも、私たちに負いめのある人たちを許しました。」ですが、この中の負いめという言葉は、あまりなじみがないものです。

この言葉は、負債と訳されたりしていますが、もっと広い意味で使われているのだと思います。他者が自分に對して為した、あるいは自分が神に對して為した、義に反する行為・神の愛に反する行為すべてを言っているように思えます。ここの「主の祈り」で言いますと、御名

(みな)をあげめない行為、みこころを地で行わないことなども、負いめになります。

こうした負いめを、自分たちも他者に対して赦す、あるいは現に赦しました。ですから、神もどうか私の負いめをお赦し下さい、と神にお願いするわけです。

私たち相対な者は、他人に対して「常に」負いめを作っています。自分では善いことをしている積もりが、実は負いめを作り、悪を為しているのです。それに多くの人は気付かないだけです。大学の教師も、勿論、その例外ではありません。日常的にそれを感じます。

この負いめは、人間同志だけではありません。人間は、自然全体に対しても負いめを作っています。物の尊厳を無視し、動物や植物(生命)の尊厳を踏みにつけているのです。でも、それを負いめと思っている人は、ほとんど皆無に近いのではないかと思います。やがて、人間がこの自然全体(地球全体)を破壊してしまうことだと思えます。ある意味でそれが、相対な者の宿命だと言えるのです。でも、この宿命を逃れる道があります。それは、神の国を一人一人の心(精神)の中に実現することなのです。しかし、現在はそれとは逆の方向に人々の心は動いています。

この「主の祈り」の最後の「十三 私たちを試みに会

わせないで、悪からお救いください」ですが、難しい言葉はありません。ただ「試み」だけが、説明が必要かもしれません。一般的な言葉で置き換えますと、試練が一番近いのではないかと思えます。

人間は、弱いものです。常に、「自己」に執らわれます。自己を護ろうとします。自己の欲望を、自己の名誉（他者からの非難や侮辱を避けること）を、自己の財産を、自己の肉親を、護ろうとします。その為に、多くの場合、「他己」を麻痺させ、義に反してしまうのです。悪を為してしまうのです。それも、既に述べましたように、多くは悪と気付かずに、或いは善を為していると思つてです。

しかし、人間は、悪魔とも呼べる「自己への執着」を捨てなければ、真に自分が幸せになること（自己実現）もできなければ、他者を幸せにすること（他己実現）もできません。

自己への執着を捨てるためには、修行がいります。ただ、「あたま」で理解するだけでは、自己を捨てることはできません。

自己を捨てる修行の徳目として、仏教ではよく六波羅蜜があげられます。それは、布施、持戒、忍辱、精進、禅定、智慧、の六つです。布施は、見返

りを期待しない他者への慈悲・愛の施しです。持戒は、戒律やきまりを守ることです。忍辱は、耐え忍ぶことです。精進は、目標に向かって努力していくことです。禅定は、ヨーガや瞑想のことです。智慧は、直観的な知をうることです。

この中、特に大切とされますのは、持戒と禅定と智慧です。戒律を守って心身を清め、ひたすら禅定に励み、智慧を得るのです。

この「主の祈り」で「十三 私たちを試みに会わせないでください、悪からお救いください。」と言うときの「試みに会わず」とは、私たちの側からいいますと、戒律を破るような試練に会うことを意味します。

修行をするとき、先ず満たさなければならぬ条件は、戒律を守って心身を清らかに保っていることなのです。いくら、信仰を深め、修行していても、例えば、人を殺したり、盗みをしたり、うそをついたり、などして戒律を破り、悪をなしては、修行が修行としての意味を持たないのです。

そういう点で、この十三節は実際的な意味があると言えます。しかし、十一節のところでも同様のことを述べましたが、いくらお願いしても試練はやってきます。

実は、それが、試練と思えるようでは、修行が足りな

いと言えるのです。人生は、いくらお祈りをしても、肉親の死に出会うこともありますし、天災や人災・事故に会うこともあります。そうした災いが起これば、財産や生命を失うことになるかもしれません。

しかし、そうした災いも、すべて神のなさることだと言えるのです。それを、自分に執らわれて不幸だと思ふのは、自己が驕慢になつてゐる証拠です。何が起ころうと神を怨んではなりません。すべて起こるべくして起つてゐるのです。そのままに受け取らなければならぬのです。

次に、十三節の括弧の中の「国と力と栄えは、とこしえにあなたのものだからです。アーメン。」という部分ですが、これはいわゆる「頌栄（しょうえい）」とよばれ、神を賛美する文章です。最後のアーメンは、神への畏敬や教えへの同意の言葉として、文の最後につけて唱えられます。

最後に、十四節と十五節ですが、赦すことの大切さを「方便」として説いています。法句経（五）にも、「実にこの世においては、怨みに報いるに怨みを以てしたならば、ついに怨みの息（や）むことがない。怨みをすててこそ息（や）む。これは永遠の真理である。」（第三卷五月号で解説）と説かれていました。

## 自作詩短歌等選

### 自分ができない事

子どもを

しつづけるとき

自分を棚上げにして

自分ができもしないことを

子どもにきびしく

いってはならない

ましてや

暴力などもつてのほか

お父さん！

お母さん！

センセイ！

自分も

できないけれど

こうこうしたほうがよい

こうこうしないほうがよい

といつてはどうですか

でも

自分もできるように

がんばっているんだよ

と付け加えてほしい

## 学校にもっと自由を

某評論家曰く

義務教育が

ストレスとなって

十四歳にして

残忍に

十一歳の子どもを

殺してしまった

こうした事件を

なくするには

義務教育が

ストレスでないように

しなければならぬ

もっと自由に

しなければならぬ

これが

逆方向であるのに

気付きもせず

こう言う

## 少年殺人防止対策

中学生残虐殺人を

生まない対策

ある評論家は

思いつかないと言う

あるルポライターは

人権教育だと言う

わが国文部大臣は

心の教育だと言う

そんなことなら

今までに

どれほど

言われたことが

## 破壊を加速する

お金への

執着ふやす

現代の

人のこころの

無毛さよ

農業こわし

自然をも

こわしこわして

行き着くは

人類ふくめ

地球をも

全てこわして

終わるといふか

## 善いところ・悪いところ

相対なものは

どこかに

善いところがあり

どこかに

悪いところがある

でも

宗教は

絶対な境地を

めざすもの

悪いところが

あつてはならない

# 自作随筆選

## 酒鬼薔薇聖斗事件

オウム真理教事件に次いで、またまた、世界を震撼させる事件が、日本で起きました。

それは、神戸市須磨区で起こった十五歳の中学三年生による、猟奇で残虐・残忍な殺人事件です。相手は、共によく遊んだ十一歳の小学六年生でした。事件の内容を語る事さえ、はばかりたいと思うような、かつてない殺人事件です。

多くの評論家や学者などのいわゆる文化人なる人たちが、「なぜこんな事件が起きたのか」「その動機は何なのか」「これは全く特異な事件と言えるのか」「今後こんな事件が二度と起こらないと言えるのか」などなど、けんけんがくがくと新聞やテレビでやっています。

橋本総理大臣も、「自分も同じ世代の子どもがいるから、何とも嫌な思いだ」「我々はどこで教育を間違えたんだろう」「教育というものを本当に考えてみなければならぬ」と言っていました。また、文部大臣も、教育を改めるよう中教審に諮問すると言っています。

でも、こうした文化人や文部大臣のことを聞いていても、一々取り上げませんが、真に適切な提案は見当たりません。人権教育や心の教育が大切であるとか、お金本位や物質本位の社会がいけないのだ、といったことは、もう言い古されてきたことで、新しい価値は殆どありません。そうしたことをしてきた結果が、今度の事件だということをもう一度、確認しなおさなければならぬと思います。

私は、今度の事件もかつてのオウム事件も、根は同じだと思っています。どちらも、現代人の「自己」肥大に原因があります。自己を肥大させた社会の特徴は、例えば、次のようなものがあります。遵法精神が薄らぐ、過去の文化を軽視する、他人を愛さないのに自分は愛してほしがる、義務を果たさないのに権利だけは主張する、自分の欲望（性欲（氏族・民族繁栄）、食欲（物欲・金銭欲）、優越欲（名誉・権力））の追求に執られる、などなどです。

こうなりますと、個人として人は自分のなしている行為が、社会的にどういう意味があるかを知ることができません。社会へ自分を定位することができなくなってしまうのです。現実と空想の区別すらよくわからなくなってきました。また、他者への感情が平板化し、鈍麻してきま



す。それと裏腹に、被害者意識が高まります。その場合、自分に被害を及ぼしてくる対象は、特定の人ではなく、不特定多数の社会一般になってくるのです。

「聖斗」君は、事件の動機を学校への復讐だと言っています。君は、それが、なぜ一人のよく知っている友達になさなければならなかったのか、説明がつかせせん。復讐対象の拡散化といっている人がいましたが、それは自己に閉じた人の特徴なのです。

このように、一見不可解に見える聖斗君の行動も、私の提唱しています「自己・他己双対理論」に照らして見ますと、とてもよく理解できます。

先月号でも触れましたが、日本では、若い人たちが自己に閉じて、他人からの甘えは許さないのに、自分は甘えるという傾向をもっています。それを、日本の社会風土として許しているのは年配の人たちなのです。したがって、日本では世界に類を見ないほど、若者の自己肥大化が進んでいるように思われます。

では、この傾向に歯止めをかけるにはどうしたらよいのでしょうか。橋本総理も言われるような「間違った教育」をただすには、どうすればよいのでしょうか。

「こころの豊かな人」「人間性を重んじる人」「お互いに思いやりを持ち合える人」を育てることが、大切な

ことは、既に言い尽くされた感があります。切実な問題は、それがどうすれば可能なのか、に関わっています。ただ徳目をあげても、実現する方法が分からなければ、絵に書いた餅に過ぎないからです。

では、なぜ適切な方法が具体化できないのでしょうか。それは、人を納得させる現代の「人を捉える枠組み」が存在しないからだ、私は思っています。例えば、こころとは何なのか、人間性と何か、思いやりとは何か、などは、人間を捉える枠組みがなければ、明確にすることはできません。我田引水のように、それが私の提唱しています「人間精神の心理学モデル」自己・他己双対理論」だと思っっているのです。

いま、世界的に問われている問題は、エゴの主張と他者の尊重をどうバランスさせるかにあります。倫理学者も、エゴの主張を抑え、他者を尊重する納得的な人間モデルの欠如を訴えています。

現在は、「個人（自己）社会」化が極度に進み、子どもに対する統制やしつけも極めてゆるくなっています。ということは、中学生にも自由が大幅に許されているということ。それは、実は、自己を肥大させているということでもあります。ところが、文化人の中には、中学生はストレスがかかっている、もつとストレスの

ないように、自由にしてやらなければならない、と主張をする人が結構います。それは、まったく間違った方向です。激烈な進学競争に組み込まれざるを得ないことを除けば、自由を与え過ぎて自己化してしまい、社会へ定位置でなくなってしまうのです。

いまや、そこから引き返し、「他己」を取り戻す必要があるのです。それには大人が、他人を信じ、神や仏を信じることを自ら実行し、子どもにそれを手本として示さなければなりません。前述の自己の欲望の追求だけが、人間の生き甲斐ではないことを身をもって教えなければなりません。伝統や規則を重んじ、善や義が相対な、例えば多数決で決められのではなく、絶対的な境地に達した人たちの言葉に従って決められなければならない。その為には、中国の孔子を始祖とする儒教が有効です。また、教育は人格完成をめざしますが、それには、大人が自ら人格完成をめざして修行しなければなりません。それを可能にするものは、仏教やキリスト教や老子やソクラテスの教えだと言えます。

自己社会化がここまで来た今、子どもの時から、修行することを教える必要があります。また、子どもには、温かい愛情と、それを伴った自由な行動と、社会ルールを教える厳しいしつけ（統制）が特に大切です。

## 釈尊のことば（五九）

法句經解説

（二〇六）もろもろの聖者に会うのは善いことである。かれらと共に住むのはつねに楽しい。愚かなる者どもに会わないならば、心はつねに楽しいである。

（二〇七）愚人とともに歩む人は長い道のりにわたって憂いがある。愚人と共に住むのは、つねに楽しいことである。仇敵とともに住むように。

心ある人と共に住むのは楽しい。親族に出会うように。

二つの偈ともほとんど同じ内容のことを言っているように思います。

聖者・心ある人と、会ったり、住んだりするのは、善いことであり、楽しいことである。それに反して、愚かなる人・愚人に、会ったり、共に歩んだり、共に住むのは、嫌で、とても辛いことである。

既に、偈（六一）では次のように述べられていました。「旅に出て、もしも自分よりもすぐれた者が、または自分ひとしい者に出会わなかったら、むしろきっぱりと

独りで行け。愚かな者を道伴れにしてはならぬ。」(第四卷九月号で解説)。

これらの偈に出てくる言葉については、ほとんど解説はいらないように思われます。内容について、少しだけ感じることを述べておきたいと思います。

まず(二〇六)ですが、「もろもろの聖者に会うのは善いことである」とあります。まさに、その通りです。聖者に会うこと、そのことが善なることです。人間がより善い人間になるためには、善い人間との出会いが要ります。ですから、その出会いそれ自身が善であるといえるのです。でも、悲しいことに現代では、人間としての人々の器量が落ちてきて、聖者がとても少なくなっていますし、また、聖者に会っても、それが聖者なのか、金儲けや売名を目的にして、手品師・曲芸師のような特技や、先祖の霊を呼び出すような特殊な能力を養ってきた、単なる凡人・愚人なのか判断できなくなっています。ですから、現代では、本物の聖者とまやかしの聖者を見分ける力を養うためにも、信仰や修行が必要だと言えます。学校教育なり、地域の社会教育なりで、子どもの時から、そうした教育をして行かなければならないと思います。

「愚かなる者どもに会わないならば、心はつねに楽し

いである」とは、これまたその通りです。では、愚かなる者とはどんな人なのでしょう。十善戒を守れない人、道・徳・仁・義・礼を重んじない人など、いろいろと基準はあると思いますが、私のモデルで言いますと、「自己」に執らわれ、「他己」を弱めている人だと言えます。現代では、多くの人がそうなっていますが。

そうした人との関係の中で、多くのストレス・悩み・不安が生み出されていきます。ですから、そうした人と会わないならば、心はつねに楽しいと言えるのです。

次に(二〇七)の「愚人とともに歩む人は、長い道のりにわたって憂いがある」ですが、いま、人間にとって一次的な基礎集団としての家族が、お互いにこうなっているのではないかと、危惧されます。夫婦、親子、兄弟関係がそうなっていないでしょうか。職場や学校のような二次的な機能集団であれば、所属を変えたり、メンバーが入れ代わることで、関係は変わっていきますが、家族関係はなかなか「ともに歩む」関係を解消することができません。それだけに、「長い道のりにわたって憂いがある」と言えます。それを逃れる道は、相手が変わることを期待してもだめです。まず、自分自身が「愚人」から脱する精進をしなければならぬと思います。それでも、逃れられないときは別離して独り歩むことです。

後記

一、このところ、毎日、畑に出ています。げしの草刈り、さつまいもやさとうきびなど、作物の中の草取り、晩生大豆の植付け、などです。

二、こちらでは、鳥に食べられないように、大豆は一旦苗床に密に蒔き、一〇日〜一四日たって、少し大きくなつたとき、二本を一株として本植えにします。根がとても強く、根の土を全て落としても完全に活着します。

三、耕運機を入手したことは、五月号の後記で述べましたが、その後も、とても調子よく動いてくれています。

四、その耕運機の管理ですが、いつも、畑にトタン板一枚を上掛けて置いてあります。そうですので、トタン板からはみ出したハンドルやベルトを懸ける部分などの錆びが、だんだんと進行してきました。見ていてかわいそうになり、小さな、屋根だけある小屋を作り、入れてやりました。有り難いことに、近所の精農家の方がいろいろと援助して下さいます。

五、今年は、私のゼミを選択してくれた人が二人ありました。先日、家で歓迎会をしました。一人は現職で、和歌山大学を卒業した男性の人です。もう一人は、学部卒の女性で、岡山市出身の人です。何かのご縁でしょう。

六、大学の紀要などに、九月末までに、二つの論文を書

くことにし、いま準備をしています。

七、一つは、自閉症児の脳半球機能差の仮説を検討する論文です。人間だけに、脳半球の機能分化が見られますが、私は、それは人間の精神機能が自己と他己に分化したためだと考えています。左半球は他己に、右半球は自己に対応していると仮説しています。そうしますと、自閉症児は左半球の機能障害だと言えます。

八、もう一つは、生きることを時間として捉え、それを倫理学として示す論文です。人生は、生（自己・有）と死（他己・無）の弁証法的統合として「成」って行きますが、それを時間とすることが、基本的構想です。

月刊 こころのとも 第八巻 七月号 (通巻 九十一号)	平成九年七月八日 〒772 8502 徳島県鳴門市鳴門町高島 鳴門教育大学 障害児教育講座気付 (ひびきのさと 沙門) 中塚 善成 <small>（よ）</small>
本誌希望の方は、郵送料として郵便振替で年間千円を次の口座にお振り込み下さい。加入者名 ひびきのさと 口座番号 01610 8 38660	

